

扉を

INTERVIEW

開く

江戸しぐさ語り部

越川禮子

Reiko Koshikawa

今、「江戸しぐさ」が脚光を浴びている。江戸時代に生まれた日常生活の知恵は、実は町衆が深い教養と英知に基づいて生み出したものだった。明治維新を経て失われてしまった「江戸しぐさ」の中には、私たちが学ぶべきものがたくさん詰まっている。「傘かしげ」「こぶし腰浮かせ」などの振る舞いを実行するだけでなく、底に流れる深い思想や哲学を知り、生活に生かすための心構えを「江戸しぐさ」に造詣の深い越川禮子氏に伺った。

「江戸しぐさ」から学ぶ上手な生き方

町衆の生活信条だった「江戸しぐさ」

——「江戸しぐさ」という言葉が広く知られるようになったのはここ数年のことです。傘をさしてすれ違うときお互いに傘を人のいない外側へ傾け、濡れないようにする「傘かしげ」など、



【こぶし腰浮かせ】

電車やバスで新客が乗ってきたら、先客はこぶし分腰を浮かせて、席をつめながら一人分の空間をつくる。新客は先客にお礼を言って席に座る。江戸しぐさは大勢の人が気持ちよく暮らすための思いやりであり共生のマナーである。

しぐさの一つ一つが注目されていますが、先生のご著書を拝読すると、本当は基本にある「江戸の文化」や「精神」が大事だとわかってきました。

越川 そのとおりです。あまりにも「江戸しぐさ」の往来しぐさが有名になってしまったので、「江戸しぐさ」の伝承者・芝三光先生は、

「ほうれんそうの缶詰を売る宣伝としてポパイの漫画を作ったのに、漫画ばかりが有名になって缶詰はさっぱり売れなかった」というエピソードに似ているね」と苦笑されていました。元の考え方をきちんと理解していただきたいと思い、私もいろいろな本や雑誌に書いております。

——「江戸しぐさ」の考え方を生んだのは、当時の町衆だったんですね。江戸時代は武家文化に基づく規範が強かったという印象がありますが、実際には町人が生み出したというのが新鮮な驚きでした。

越川 いわゆる町方の一番上に立つ人たちが、今で言うなら経団連のメンバーのような人たちの生活信条が「江戸しぐさ」。そういう人たちが優秀だったんですね。彼らが中国の古典・四書五経などいろ

いろ勉強し、それを咀嚼してやさしい言葉に置き換え、一般の町人にも理解できるようにしていったのです。その言葉がやさしいだけではなく、美しいんです。しかも、ユーモアがある。これがすごいことだと思えます。やさしくしても品格を落とさないためには、相当教養がないといけません。

学者ですと、難しいことを難しく言っても通用するわけです。でも、それでは一般の人には理解できません。

「江戸しぐさ」が持つ深い思想性

——「江戸しぐさ」をきちんと理解するためには、ある程度古典のことでも知らないといけませんね。

越川 一般の方ならともかく、最近では編集者とかテレビ・広告のプロデューサー、ディレクターとい

う方が「江戸しぐさ」を取り上げることが増えています。そういう方たちにはぜひ根本を知ってほしいです。

例えば陽明学。「江戸しぐさ」のルーツには陽明学が入っています。

す。日本陽明学の祖と言われる、
中江藤樹の「五事を正す」は「江戸しぐさ」そのものです。

● 貌（顔かたち）

愛敬の心を込めてやさしく和やかな顔つきで人と接する

● 言（言葉遣い）

相手に気持ち良く受け入れられるような話し方をする

● 視（まなざし）

愛敬の心を込めて温かく人を見、物を見るようにする

● 聴（よく聴く）

相手の気持ちに立って、話に耳を傾ける

● 思（思いやり）

愛敬の心を持って、相手のことを思いやる

中江藤樹はこの五事を正せば、良知（誰とでも仲良く親しみ合い、尊敬し合い、認め合う美しい心）に至ると教えています。

——本当に「江戸しぐさ」との共通点が多いですね。

越川 そうでしょう？ ただ中江藤樹は学者先生ですからあまりやさしく言ってくれない（笑）。今でも会社の社長さんたちが朱子学や陽明学を勉強していらっしや

るけれど、なぜあんまり世の中が良くなっていないかというところ、難しい言葉で語っているから。それでは世の中に広がらないんです。

その点「江戸しぐさ」はわかりやすく、子どもでもできることが多いから効果的なのです。「ゴミを拾う」とか「挨拶をする」「思いやりの心を」など、ささやかなことの積み重ねで世の中を楽しく、気持ち良くなる事ができる。「日本を美しい国にしよう！」と叫ばれても、庶民はどうしていいか分からないけれど、ささやかで具体的なことを偉い人たちが率先してやってくれば、みんながまねをする。私が「江戸しぐさ」を

成長段階を重視した江戸の子育て哲学

——子どもが「世辞」を言うとき褒められたというのが面白いですね。この場合の「世辞」とは、今で言う「お世辞」とは少し違う意味であったとか。

越川 そうです。「こんにちは！」と挨拶したあとで必ず何か一言添える。それができれば褒めてやる。



お話するようになって一六年たちました。知れば知るほど人情の機微に通じ素晴らしいと感心します。

江戸時代、子どもを段階的に育てる養育法として、

「三つ心、六つ躰、九つ言葉、十二文、十五理で未決まる」という教えがありました。

（三つ心）

三歳まではまず心の存在とその大事さを感じさせる。大人たちの

間で静かに我慢することも覚えさせます。

九州大学の井口潔先生は、「ヒトはヒト科の動物として生まれ、

一〇歳までに教育で人間になる。良い人間になるには三歳までに眠っている感性を揺り動かすことが一番大切だ」とおっしゃっていますが、江戸の人はそれを実践していました。

（六つ躰）

六歳までに大人たちの振る舞いを見習わせ、寺子屋などできちんと師匠の目を見て話を聞くように

すらりとした長身の越川氏。しゃっきりとした身のこなしと気配りが、「江戸しぐさ」の語り部らしさを感じさせる。最近アメリカにも招かれ、日系人中心の会で講演してきた。



こしかわ・れいこ ● 1926年東京生まれ。1944年青山学院女子専門部卒業。1966年女性スタッフのみで市場調査や商品企画を手がける株式会社インテリジェンス・サービスを設立。現在は取締役社長。2007年「NPO法人江戸しぐさ」を発足、理事長就任。テレビコマーシャルや公共マナー広告「江戸しぐさ」キャンペーンで、さりげないマナーの大切さを訴え、これにより江戸しぐさが一気に全国に広がる。現在は唯一の「江戸しぐさ語り部」として、「江戸しぐさ」の伝承と普及のために精力的に活動を行っている。著書に『商人道「江戸しぐさ」の知恵袋』『江戸の繁盛しぐさ—イキな暮らしの知恵袋』など。

させます。

(九つ言葉)

九歳までには、どんな人にも失礼でない挨拶ができるようにします。「さようまでございます」とか「お寒くなりました」という大人の会話、つまり「世辞」が言えるようになりますのです。九歳になっても「世辞」が言えないようでは、将来江戸商人として大成しないと見られたんです。

——それは厳しいですね。現在の知識重視の「早期教育」とは違えます。

越川 今みたいなことをしても意味がないですよ。まずは子どものみずみずしい感性(生きる力)に

訴え、体感させることが大事だと、江戸の人は知っていたんです。

(十二文)

「十二文」とは、一二歳のころには一家のあるじの代わりに手紙を書けるようにしておくことです。あるじが死んでもすぐに代役ができるように、注文書や請求書、苦情処理の弁解書もまがりなりにも書けるように鍛育(たんでい)していたそうですから大したものですよ。

(十五理)

「十五理」とは、経済、物理、科学などの森羅万象を暗記でなく、実感として理解できるようにすること。このように段階を踏んで、きちんと子どもを育てる大事さが

理解されていたのです。生きる力

となる感性を磨かず知識だけ詰め込んで、躰を後まわしにしてしまつと、現在のようになっている間題が起こつてくるわけです。

——親の問題も大きいですよ。

越川 先日タクシーの運転手さんから聞かされて驚いたことがあります。運転していたら子どもが飛び出してきたので慌ててブレーキを踏み、事無きを得たんだそうです。ほっとして降りて、その四歳

ぐらいの子に「大丈夫かい？」と言ったら、その子は自分が悪いことをしたのを知っていて、わあわあ泣きながら「おじちゃん、ごめんなさい！」と謝ったそうです。「けががなくてよかった」といわ

わっていたところに今度は母親が飛び出してきて、「何であやまるの！」と子どもをもものすく叱つたんです。運転手さんは頭にきちゃって、「あんたよりよっぽど子どもの方が立派だ！」と喧嘩になったそうです。

難癖をつけられて、何かを要求されたら嫌だとか、そういう変な方向に頭が働くんです。そんな親の姿を見て子どもがどう思うか。

損得だけで判断する。悪いことでも「上手に見つからないようにした方が得だ」というようなずるい考え方をする大人が増えていきます。

——ビジネスの世界にも通ずる話ですね。

越川 「儒商」という言葉があります。ただ商いでお金をもうけるだけでなく、ちゃんと世のため人のためになるようなこともしている商人を「儒商」と呼び、「あなたは儒商みたいですね」と言われたらそれは褒め言葉なのです。「江戸しぐさ」の中に、「良きものを良き暮らしをするために調達するのが商人だ」という考えがあります。

ダンテの『神曲』にも、同じような言葉があるそうです。「良き暮らしをするための良きものを商うのが商人だ」。だから「グッズ」から転じた「グッズ」という言葉も生まれる。そうしないと神罰が下ると書いてあるとか。「儒商」も同じで、儒教精神でやれば、企業倫理に反することなどできないでしょう。お金をもうけることが悪いのではなく、やり方、使い

方の問題です。

一時脚光を浴びながら失脚してしまう経済人の中には、派手な暮らしぶりをもてはやされていた人

ビジネスパーソンに役立つ「江戸しぐさ」

——たしかに「江戸しぐさ」に関するご著書を拝読しておりますと、現代のビジネスパーソンが学ぶべきことがたくさん入っています。

越川 江戸時代はいろいろ「講」（目的を一つにする人びとの集まり。「富士講」とか「頼母子講」などが有名）がありました。「江戸しぐさ」関連では「べからず講」というものがあつたんです。これは「してはいけない」ではなくて、「こういうことをしたら江戸の商人として軽んじられるよ」という反省のための講でした。

例えば「こんなはずではなかった」と江戸商人が言ったら、もう商人の資格がない。それから「あの商人は人がいいから倒産した」とも言っただけじゃない。それはその人がバカだったと言っているのと同じことだから。また、見て分

もいます。自分のためにお金を使うだけでなく、世のため人のために使っていれば失脚せずに済んだかもしれませんね。

かることを言ってもいけない。「あなた、痩せましたね」とか「あなた、禿けていますね」などというのはダメ。つまり「べからず講」とは自己研鑽をするための集まりなんです。

——私は「時泥棒」が印象に残りました。

越川 時間をすごく大事にしたんですね。自分の時間が大切なように、相手の時間も無駄にしない。今だって電話をかけたときに「今二〜三分お時間を頂いてもよろしいですか？」と言えるか言えないかが大きい。何しろ「時泥棒は弁済不能の十両の罪」と言うんですから。

——ところが、この「江戸しぐさ」が最近になるまで忘れられてしまっていた。これはなぜでしょう。
越川 明治維新でそれまでの江戸の文化が廃仏毀釈などととも

壊されたことが大きかったでしょうね。江戸の町衆は何事も控えめを良しとしていました。ところが明治維新でよそから人がたくさん入ってきて、勝利した勢いで傍若無人に振る舞う人も出てきた。それをを見て、江戸の人間は眉をひそめていたわけですが……明治政府の中では江戸のことを悪く言う人が多かったそうです。結局、江戸の良さがどんどん消えていきました。

次に戦時中。国民は出征や勤労動員などとにかく戦争に追い立てられていました。戦後は経済一辺倒になり、「欧米に追い付け、追い越せ」で必死になってしまつた。三段階ぐらいで「江戸しぐさ」の精神は失われていったんです。

——本来は、誰でもきつかけさえあればできるところが「江戸しぐさ」の良さ。復活させたいです。

越川 子どもなんてものすごい直感力を持っていますよ。すぐに真髓をつかみます。私は子どもたちを集めた講演もしますが、この間なんか「江戸しぐさをやってみた子は壇上に来て」と声をかける

と、ちょっと恥ずかしそうにしながら五〇人ぐらいわつと出てきましたよ。「傘かしげ」なんて、うれしがつてやっているんですよ。

——「上手な『世辞』の言い方」なんて子どもに教えたら喜んでやりそうです（笑）。

越川 そうですね。うまくできたら大人がうんと褒めてやる。親とは違うよその大人に褒められるって、子どもにはうれしいことなんです。形ができるようになったら、だんだん心についても学んでほしい。「江戸しぐさ」はハードとソフトの両方が同時にあつて発達したのですから。

「江戸しぐさ」が本当に身についた人は、まわりから見ても美しい振る舞いの人だったことでしょう。日常生活が粹で、とにかく格好いい。だから長屋の「熊さん八つつあん」までもまねするようになった。「江戸しぐさ」の本質を学んで、少しでもそういう大人が増えていくと良いのですが。

——おっしゃるとおりですね。本日はどうもありがとうございました。